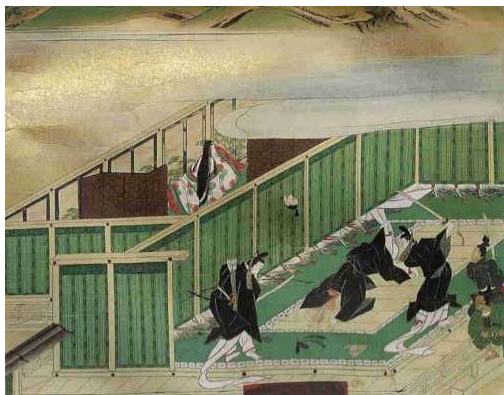


茜色の歌姫



第一部 乙巳の変



多武峰縁起絵巻

戊申に、天皇大極殿におはしに御ます。古人大兄侍りはべ。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、
昼夜剣持けることを知りて、俳わざおき儼に教へて、方便たばかに解かしむ。入鹿臣、咲わらひて剣を解く。入りて座に
侍り。(中略) 中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便めんら旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄やあ嗟」との
たまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意ゆくりもなき、剣を以て入鹿が頭肩やがを傷り割そこなふ。入鹿、御座に転び就き

て、叩頭みて曰さく、「まさに ひつぎのくらしい 嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起(た)ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦、水庭に溢(い)はれり。席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。〔日本書紀〕

卷第二十四)

第五章 太極殿の雨夜

645

「葛城皇子も、むごい策を思いついたものよ」

難波は、大和にとつて、海の玄関口である。筑紫や伊予、さらには百済や新羅の使者を乗せた船はまず、難波の津に入り、紀の国との境に流れる大河を西へと進み、飛鳥へ向かう。

この難波を差配していたのが、宝大王の弟、軽皇子であった。

眼たげに垂れ下がった眼、太く開いた鼻、小さな唇。戯れ言遊び事を好む、との評判であったが、時折、細い眼が陰気に光る。

難波の宮を訪れた中臣鎌子と向かい合い、葛城皇子よりの伝言を聞いた軽皇子は、ため息を

漏らし、しばし黙し、それから口を開いた。

「吾は何もせぬ、それでよいのだな」

鎌子は、頷いた。

軽皇子は、やや笑みを浮かべ、早く去れ、と言わんばかりに貌を背けた。鎌子は立ち上がり、拝礼し、静かに去った。

板蓋宮よりわずか一町(約100メートル)、甘樫丘の上に、蘇我鞍作の邸がある。飛鳥のどの王族の宮や豪族の邸も及ばぬほど広大な邸には、盾や柵が並べられ、板蓋宮を威圧するように

見下ろしていた。

「古人皇子を撰政とは……」

齢七十になる蘇我毛人は、白い髭を撫でつつ言った。

「しすぎではないか」

庭の高楼からは、飛鳥の平野が一望される。そこに父親と並んで立つ蘇我鞍作は、笑みをもつて応えた。

「かの田村大王に奪われた大和の大王位を奪い返すのは、今において他にはない」

「あたかも汝が大和の大王たるべきかのような口振りよの」

毛人は眼を細めて笑った。厨戸皇子とともに、大和の隆盛を築いた大臣蘇我馬子の長男は、しかしすぐに笑みを消し、諫めるような口調を作った。

「汝は、やや事を急きすぎる。無用の恨みを得ぬよう、気を配れよ」

「大王が腹に、吾が子が宿っていても……」

鞍作は、不敵な笑みを浮かべた。

「蘇我に刃向かう者がいると？」

毛人は不快げに黙り込んだ。細心で用心深い彼は、それだけに、豪放で自信に溢れた己が子に、どこかしら、かなわぬものを覚えていた。如何ように諭そうとも、鞍作は父の諫めを聞き入れることはなかった。声高に反論されると、常に毛人は黙るしかなかった。そして、鞍作が大臣を継いで後、蘇我の威勢と富は、増える一方だった。

「馬子大臣が、厨戸皇子と編まれた、かの国史……」

鞍作は、遠くを眺めるような眼差しで言った。

「吾が十歳のとき、蔵で国史を読まされた時より、吾は、田村大王さらには宝大王の宮に仕える史人どもの語りの、偽りを知った」

史が、やがて歪められ、偽られて伝えられるものならば、ならば、吾は新たな歴史の礎を築きたい。大臣として、蘇我一族の栄えをただ保つためのみに、生きたくはない。

鞍作の呟きに、毛人は唸った。

「汝はやはり、大王に……」

「否」

鞍作は首を振った。

「むしろ、あらたな国をこそ、築こうと」

「おそれがましや、おそれがましや……」

毛人は苦笑し、汝が新たな国を築くまで、長生きしたいもの、と言いつつ、高楼の階梯を降りた。鞍作は、老いたり……とつぶやきつつ、父に随った。

高楼の下では、二人の女孀が待ちかまえ、膝を折って拝礼し、冷たい水の入った透明の瑠璃の杯を差し出した。毛人と鞍作は杯を受け取り、喉を潤した。

「あれは……」

毛人は、一人の女孀に眼をやり問うた。広い額、濃い眉、整った鼻筋。年は十八くらいか。

「新しい女孀か」

「はて」

鞍作は首を傾げた。

「女どもの差配は、妻に委ねておる故」
拝礼し、忙しげに立ち去った。

「ふむ……」

「齢を重ねても多淫の血の収まることのない毛人は、背を丸めてのぞき込むようにして、汝が名は？」と問うた。

「やな……、と女孀は恥ずかしげに俯いたまま名乗った。

「やな、か。その名を繰り返しつつ、毛人は己が家へと向かった。

女孀は膝を突いて見送っていた。その唇がかすかに歪んでいた。

その夜。

河辺の大海人皇子の宮の門が叩かれた。

「蘇我鞍作である」

舎人どもは慌てて門を開き、馬を下りた鞍作は、大股に家の方へ歩んだ。

広間で皇子と相對した鞍作は、拝礼を終えると、手にした瓶を床に置いた。

「百濟よりの貢ぎの珍酒。皇子も味わいたまえ」

苦笑する皇子に、思いついたら、すぐにせねば気がすまぬ性ゆえ……、と鞍作は笑った。杯や肴を運んできた女孀どもが下がると、鞍作は言った。

「皇子は何故に、甘樫丘なる吾が邸を訪ないたまわぬのか」

皇子は俯き、笑みを作った。異母兄なる葛城皇子が敵意を示す蘇我鞍作の邸を訪なうわけにはゆかない。

「吾が娘も皇子の訪ないを待ち奉りている故、是非にも」

「いずれ」

ところで、と鞍作は話を変えた。

「皇子は、七枝の劍を存じていますや」

「七枝の劍？」

「劍の左右の端から、それぞれ三本の刃が枝のごとく生えたる劍。大和の大王家の祖たる日輪の女神が地上に降り立ち、国を統べるべき者に与えた神劍」

日輪の女神……。伊勢で巫那から聞いた昔語りが、脳裏に蘇った。天照と素戔嗚の争い、天の岩戸……。

「かつては、国栖にあったと、吾が邸に蔵せる国史には記してあったが、今はいづくにあるか知れぬ。国栖は、今はなき国であるが、推し測るに伊勢のこと。皇子よ、七枝の劍のことを、聞きたもうたことはありや」

皇子は首を振った。鞍作は重ねて問うた。

「さらば、伊勢に、古をよく知る史人の如き人のありや？」

阿礼ならばあるいは……と思つたが、皇子は応えず、問うた。

「その七枝の劍を求めて、如何する？」

「大和の大王家の御稜威を、より盤石にし奉る」
鞍作は淀みなく応えた。

「皇子よ、民を統べるには、さまざまな仕掛けが要る。厳かな王宮、仏の教え、官位に沿った冠、史人の語る昔語り……。民に仁政を施しても、民はひたすら求め、傲りが芽生えるのみ。大王ならではの厳かさを纏うてこそ、民も臣も崇め奉る」

年若い皇子に教え諭すように、鞍作は続けた。
「日輪の女神の授けたもうた七枝の剣を持つ者こそ、正統なる大和の王。その証を手に入れれば、大王家はより、完きものとなりたまう」

皇子は、何故に、飛鳥に入る前に、吉野宮に鞍作が馬を走らせて訪うたのか、臍に分かったように思った。鞍作は、なんとしても七枝の剣を手に入れようとしている。その手がかりを、大海人皇子から得ようとしている。

なんのために？

「鞍作の大臣よ」

大海人皇子は問うた。

「その七枝の剣は、厨戸皇子と汝が祖父なる馬子が編んだ国史に記されているのか？」

「然り」

「その国史は、汝が甘樫丘の邸に蔵せると、汝は言うたな」

「然り」

「板蓋宮の蔵ではなく？」

鞍作が口を噤んだ。何故に、口を噤んだか、大海人皇子は知っていた。三輪の、箸墓の池の畔で、葛城皇子が鏡郎女に問うた、土蜘蛛のこと。蘇我の蔵にあるという国史にのみ記された土蜘蛛。

本来、大王の蔵にあるべき国史が、何故、蘇我の蔵にあるのか。

「皇子よ」

しばし黙し、やがて鞍作は口を開いた。

「板蓋宮の蔵に収められた史など、皇子の父なる田村大王の御代から編み始めたばかり」

その声音は、肉に食い込むような鋭さを帯びていた。

「史とは、国を統べる者が、その立場を盤石にするために欠かせぬもの。皇子は、いずれは大王の御位に即かれるやもしれぬ方。七枝の剣と国史。この二つを合わせ持たたまえれば……」

鞍作の眼が、心の裡を見透かそうとするかのように、じっと大海人皇子の眼に注がれて離れなかった。

「吾が大王に？」

大海人皇子は眼を逸らして、笑みを浮かべた。

「鞍作の大臣よ……大和の大王は、汝が、選ぶのか？」

鞍作は、口には出さず、眼のみで頷いた。

そのころ。

甘樫丘の蘇我の邸。

褥しじねの上に仰向けに横たわる蘇我毛人に覆い被さるるように、やな、という女孀は、老人の軀の敏感な部分をまさぐっていた。

「やな、よ……」

七十の老人は、初めて女とまぐわった男おのわらべ童のようにあえぎ、身をくねらせつつ言った。

「汝は……いづくでそのような技を……」

やなは応えず、老人の股間に貌を伏せた。老人は呻き、雄叫びをあげ、愉悦に酔った。

蘇我鞍作が去った後、大海人皇子は、疲れを覚え、褥に潜り込んだ。

伊勢を出で、飛鳥の手前の吉野宮で留まりし時、前触れもなく蘇我鞍作が訪れたわけは、七枝の剣について、大海人皇子が知っているかもしれないと期待してのことであった。

一方、葛城皇子は、三輪のいづくかに築かれつつある土蜘蛛の邑むらを、己が自在になすために、命がけて鏡郎女とまぐわった。

七枝の剣や土蜘蛛をその手にすることで、彼等は何を得ようというのか、十四歳の大海人皇子には分からない。ただ、眼に見えぬところで争いが生じており、互いに策をめぐらしている、その最中に巻き込まれたことが、ひどく煩わしかった。

伊勢いせに還りたい……。

ふと、大海人皇子はそう思った。

阿礼に会い、飛鳥で見聞きしたことを語り、その意味することは何かを問いたい。

「髭も生えそろわぬ頃に若返ったかのよう……」

蘇我毛人は、仰向けに臥したまま、笑みを浮かべてのぞきこんでいる、やなという名の女孀を見上げた。やなは、しなやかな指で髪をかきあげ、額の汗をぬぐい、老人の股間に左手を延ばし、硬く屹立した陽物を緩やかにしごきつつ、右手の指に丸い薬をつまんで口に含んだ。

「さらなる喜悦を、味わいたまえ」

言いつつ、老人の唇に、己が唇を寄せた。丸薬は口移しに老人の口に流し込まれた。

多淫な性にもかかわらず、加齢の衰えゆえに長く忘れていた快樂が、老人の身の裡に蘇った。

老人はすでに、かつて飛鳥の王都で権勢を振るった前まへ大臣おのおのみではなかった。

老人は、しだいに現うつから離れ、宙を浮いているがごとき夢心地に陥った。

女孀の声こゑが、木霊こだました。

蘇我の蔵には、多くの財たからがあると聞いた。

然り。

なかでも……厩戸皇子と蘇我馬子大臣が編まれた国史。

然り、然り。

その国史は、いづくの蔵にありや。

高樓の傍らの蔵にあり……。

その蔵の鍵は……。

鞍作が寝屋に……その、寝屋の、毎夜、褥を敷くあたりの床のあたりに……。

冷たい汗にまみれた褥に、臉を閉じ、赤子のように口を半ば開け、露わな裸身を曝して寝入る老人を見おろし、女孀はそつと、体液に濡れた指を、布でぬぐった。

蔵の鍵は、鞍作が寝屋にあり……。

鞍作は今宵、いづくかへ独り、出掛けたはず……。

早くも……。女孀は、唇を歪めてほくそ笑んだ。

同じ頃。

三輪の箸墓の池の畔。

塚へと繋がる舟橋に通じる門の前で、中臣鎌子と、鏡郎女が対峙していた。

「葛城皇子に伝えよ」

郎女は、陰鬱な面差しに眼を伏せて佇む鎌子に、笑みを浮かべて言った。

「案じたもうなかれ……すでに事はなつたも同じ、と」

その二日の後。

難波の軽皇子から飛鳥に報せが飛んだ。難波の津に長らく留まっていた百済の官が帰国することとなり、飛鳥にのぼって大王に拝謁を希っているという。

百済の官を送別する宴が、板蓋宮で開かれることとなった。

その日取りは、六月の戊申、すなわち十二日と定まった。

その日の朝より、飛鳥は烈しい雨に降り込められていた。

甘樫丘の蘇我の邸からは、大極殿の宴に招かれた王族・大官の輿が、笠をかぶった伴部どもに担がれ、続々と板蓋宮の門をくぐってゆくのが見えた。

着替えを終え、高樓の椅子に坐し、独りその様を見下ろしていた蘇我鞍作は、輿が調ったとの声に、ゆっくりと立ち上がった。階梯を降りると、伴部どもが駆け寄り、傘を差しだした。

鮮やかな刺繍で天女の舞う姿が縫い込まれた天蓋つきの輿が、雨に打たれていた。鞍作の妻妾ども、一族の者どもが、蘇我が家の主を見送りに集まっている。その後には、彼等に傘を差し掛ける大勢の伴部ども。

「父は、如何した」

傍らの者に問うと、まだお寝みになっている、と応えが返ってきた。近頃は、よほどかの女孀がお気に召されたか、毎夜、寝屋を伴にされていると聞いた、若い乙女に精も魂も抜かれてしまわねばよいが……。豪放に笑う

鞍作に、一族の者どもが和した。



伝飛鳥板蓋宮跡（奈良県明日香村）

板蓋宮——。

檜皮葺の屋根を打つ雨音が、大極殿のうちに響いていた。

すでに、飛鳥の主立った王族・大官が貌を揃えていた。賓客たる百済の官人三人も着座している。空いている席は二つ。その席に、大臣たる蘇我鞍作と、撰政たる古人皇子が坐れば、宝大王が内裏より出座し、儀式が始まる。

待たせることも政事……。

口を聞くことも出来ず、坐したまま撰政と大臣が来るのを待つ王族・豪族の貌をそつと眺めながら、大海人皇子は思った。

鞍作ならば、臆せずそう口にするだろうな……。

鞍作の坐るべき席と向かい合う場所にある葛城皇子が眼に映った。臉を閉じ端座して動かない。そういえば……。今朝、河辺宮を発つたとき、たまたま葛城皇子も同じ刻に門を出てきた。輿の周りを固める舎人のなかに、ふだんは見慣れぬ貌があった。いま思い出したが、あれは子麻呂というたか、蹴鞠の仕合で、赤い巾を着けていた者。

大極殿の外で、人の騒ぐ声があった。

やつと来たか……。待ちくたびれていた人々は、ほつとため息をつき、曲がっていた背を伸ばし始めた。

蘇我鞍作の輿と、古人皇子の輿が、門をくぐった。輿から降り立った皇子と大臣が、階梯を登り、大極殿の裡へと消えるのを確かめ、門を守る兵どもは、安堵したように貌を見合わせた。

「宴が終わるまでは、休める」

「長引いてほしいが」

口々に言い合い笑った。その背後に、すつと人影が立った。振り向くと、中臣鎌子だった。慌てて拝礼する兵どもにも、鎌子は告げた。

「門を堅く閉じ、誰も入れるな。誰も出さな」

大極殿のうちでは、儀式が始まっていた。

百済の官どもが、大王への奏文を読み上げ、貢ぎ物を差し出した。大王の前には、御簾が垂らされ、その表情は何えない。

広やかな殿の天井は、四隅の太い柱で支えられている。葛城皇子は、そつと、入り口の扉に近い柱を見やった。そこに潜んでいるはずの人影を確かめるように。

板蓋宮の扉に穿たれた六つの門がすべて閉じられた。門を守る兵どもは、中臣鎌子と二人の舎人が、足音をひそめるようにして、大極殿のうちに入ってゆくのを見た。

中臣の者は、昇殿を許されていないはずだが……。

いぶかしがる兵は、しかし、見なかったことにしよう、とすぐに決めた。上つ方のされることに関われば、ろくなことにはならない。

儀式は終わり、酒が運ばれ、宴となった。

樂人が現れ、にぎやかに琴や鼓を鳴らした。奥より、面をつけた二人の俳優が飛び出し、拝礼した。

歌舞が始まった。俳優の一人は、髭を生やした面をつけ、黒い貫頭衣に髷(すね)をむき出しにし、髪を結び上げ、頭に布を巻いて覆っている。もう一人は、乙女の面をつけ、裾長の裳に薄紅色の巾を巻き、髪の毛はほどこいて垂れ、手には蓮の葉。

髭を生やした男が、乙女に妻問いしている場面らしい。男は頭を下げ、物を贈り、歌をうたい、必死にかき口説こうとするが、乙女は恥じらい、誘うような仕草をしたかと思うと突き放し、靡こうとしない。

俳優たちの滑稽なしぐさに、大極殿の王族も大官も、声をあげて笑い、手を打った。

ただ独り、眼を見開き、拳を握りしめ、じつと乙女役の俳優を見つめていたのは、大海人皇子だった。

巫那……。

確かに巫那であった。

背筋をぴんと伸ばし、それでいて、腕や腰、脚の動きが柔らかく、なにげない仕草で、男に口説かれる乙女の、戸惑い、恥じらい、それでいて巧みに男の気を逸らさぬ狡さを、鮮やかに表している。

その身振りの、細やかさは、伊勢で、海部石床、村国男依、朴本大國らとささやかな宴を開いたおり、天の岩戸に隠れた天照の女神の昔語りを舞った時と同じであった。

巫那が、俳優に……。

何故に……。

巫那を連れ去ったのは三輪の山中に土蜘蛛の邑を作りつつあるという鏡郎女。

もしや……。

二人の俳優は歌舞を終え、拝礼した。大極殿のなかを、雷が鳴るような拍手が響いた。男の面をつけた俳優が、退出した。

独り残った乙女の面をつけた俳優は、蘇我鞍作の前に進み出て、片膝を突いた。

やはり……。

大海人皇子は、膝をつかみ、握りしめた。

そのとき、扉に近い柱の陰に、二人の舎人が剣を抜いて立っている姿が、眼の隅に映った。

「蘇我の大臣よ」

俳優は、愛らしい仕草で拝礼し、両手を差し出した。

「大臣の御腰に下げた、長くて太きものを、吾に賜れ」

群臣がわっと哄笑した。鞍作は、両手を打って喜び、

「諾、諾」

とうなずきながら、立ち上がった。腰の長剣をはずし、乙女の両手に乗せた。

「汝が欲する長くて太きものとは、これか？」

人々は、鞍作の諧謔を称え騒いだ。

「否、否」

俳優は、鞍作の剣を脇に押しやっつて首を振り、すつと膝を進めた。

「これを」

右の手が、鞍作の股間に伸びた。

次の瞬間、鞍作は身を反らせ、絶叫した。

俳優の手の中で、肉の弾ける音が響いた。

咄嗟！

奇声を発して柱の陰から飛び出してきた二人の舎人の刃が、白眼を剥き、口から血反吐を垂らし、股間を手で押さえ、床にくずおれる蘇我大臣を襲った。

たちまち、その軀は切り刻まれ、噴き出た血が大極殿の床に迸った。

驚き立ち上がる者、逃げようとして立てず這う者、わめき声をあげる者、混乱に包まれる中、大海人皇子は、乙女の面を着けた俳優が、そつと殿の扉を通り抜け、外へと走り出るのを見た。

大海人はすぐに後を追った。

「鎮まれ！」

葛城皇子が、悲鳴をあげて右往左往するひとびとを一喝した。御簾の前に進み出、呆然と立ちつくす宝大王に向かって叫んだ。

「鞍作は、大王家を滅ぼして、国を傾けんとす。大和を統べるべき血筋の吾等を、鞍作に代えん

となされるや！」

青ざめた大王の唇が、細かくふるえていた。御簾越しに、二人の刺客によって無惨な肉塊と化してゆく蘇我鞍作を見つめ、やがて、手で腹部を押さえ、昏倒した。

左右の采女が駆け寄り、大王を奥の内裏へと引きずるように随れ出した。大王の裳裾は深紅に染まり、点々と血の痕を床に残した。

「亜那！」

扉を出たところで、皇子は俳優の背に叫びかけた。檜皮葺の屋根から、滝のような雨だれが庭の玉砂利を打っている。

俳優が振り向き、その拍子に面が落ちた。

やはり……亜那……。

一年のうちに、亜那は、その美しさをいや増していた。大きな瞳が切なげに見開かれていた。何故に吾を助けなかった……、志摩の津でそう呟いた時と同じ眼……。

「亜那……何故に」

歩み寄ろうとしたとき、皇子は股間に重い衝撃を受けた。

皇子の急所を蹴り上げた亜那は、身を翻し、外へと走り出た。

「痛……」

皇子はしばし、右手で股間を押さえ、膝を突き、痛みに耐えていたが、齒を食いしばって立ち上がり、殿の外へとよろめきつつ階梯を下り、雨の降りしきる庭に出た。

「皇子よ！」

舎人の石床と男依が、大極殿に接して建てられた、舎人や伴部どもの控え家より出で来て、駆け寄った。

「汝等、見なかったか」

大海人皇子は呻いた。

「何を？」

「旦那……を」

「旦那？」

石床と男依は貌を見合わせた。

「旦那が、この板蓋宮に……？」

見れば、閉じられていたはずの門が一つ、開いていた。その傍らに、門を守っていた兵どもが、股間を両手で押さえ、あるいは血を噴く鼻孔や、折られた腕を抱え、七転八倒しながら雨のなかに悶えていた。

皇子はわめいた。

「あの門から出た！ すぐに馬を！」

そのころ。

甘樫丘の蘇我の邸。高樓に近い蔵のなかで、やな、と名乗った女孀が、篋をあけ、なかの古い紙の巻物を広げ、新しい紙に筆で写していた。暗い蔵の中を、土器の油に浸した藁しべの炎が照

らし出していた。

最後の一行を写し終え、深く息を吐き、筆をしまい、紙を畳んで懐に入れて立ち上がった。

篋は開けはなつたまま、かすかな笑みを浮かべて立ち、やがて蔵に現れる人を待った。

扉が開いた。蘇我毛人が、二人の伴部を随れて入ってきた。

「やな！ 汝は……」

青ざめてうめく毛人とは対照的に、女孀の面差しはかすかにも動かず、唇には微笑みが称えられたままだった。

「捕らえよ」

毛人の命に、二人の伴部が歩み寄った。左右から腕を挿んだ。

次の瞬間、伴部どもの軀が宙に浮き、一回転して床に落ちた。女孀は、蛙のように仰向けにもがく一人の伴部の股間を踏みつけた。伴部は悲鳴をあげて悶えた。やっと立ち上がったもう一人の伴部の股間を、女孀は走り寄って膝蹴にした。伴部は呻き、床にくずおれた。

呆然と立ちつくす毛人に、女孀はゆつくりと歩み寄った。

「やがて、この邸は兵火に包まれる」

愕然とする毛人をあざ笑うように、女孀は両手で頬だらけの頬を包み込んだ。

「心安らかに。国史はすべて写した。あとは、吾等がたいせつに、後の世に伝えようぞ」

「な……」

毛人は、烈しく身を震わせながら問うた。

「汝は……」

次の瞬間、女孀は膝を突き上げ、老人の股間を撃った。老人はうめき、うずくまった。女孀はすばやく、老人の腰の剣を奪い、足蹴にして仰向けにし、開かれたその口に切っ先を突き入れ、延髄まで貫き通した。

絶命した毛人を、女孀は引きずり、開いた筐にうつぶせにもたれさせ、あたかも自ら、喉を刺し貫いて死んだよう装った。

さらに、股間を押さえ、呻き、這って逃げようとする伴部どもを足蹴にして転がし、一人の剣を奪い、次々と刺殺した。

女孀——安見娘は、息ひとつ乱さず、蔵に転がる三つの屍を眺め、燈を点けた土器の油を床に撒き、火を放ち、静かに蔵を出た。

蔵はやがて、火に包まれた。

烈しい雨の中を、大海人皇子は独り、馬を走らせた。

行き先はひとつ。

三輪の箸墓。

やがて、煙るような雨筋の向こうに、ほどいた長い髪を靡かせ、馬を走らせる女が映じた。

「巫那！」

皇子は叫んだ。

「巫那！ 巫那！」

巫那は、ちらりと後ろを振り返り、さらに馬腹を蹴った。

「子麻呂、網田」

葛城皇子は、俯せに血の海に沈んだ鞍作に、さらなる剣を浴びせようとする二人の舍人を押しどめた。

「大王の宮が血で穢れた。疾う庭へ」

二人の刺客は領き、血塗れの屍を担いで、池のように水の溜まった庭へと運び出そうとした。

「待て！」

その声に、刺客どもは振り向き、屍を床に置いて拝礼した。

震えおののく大官のなかにあつて、摂政の古人皇子が立ち上がり、貌を強張らせて葛城皇子に詰め寄った。

「葛城皇子よ、大王の御前で、何故に大臣を斬った？」

「すでに陳べた」

葛城皇子は、すぐさま返した。

「大臣は、吾等大王家を滅ぼし、自ら大和の大王にならんとした。故に、斬った」

「それは、大王の詔によつてか」

「否」

「皇子が独りの謀か！」

「天の命に随うたのみ！」

葛城皇子は、両手を広げ、群臣に向かって叫んだ。

「大和を統べるは、吾等大王家が一族。蘇我ごときに、この大和を壟断ろうだんさせてなるものか、これぞ……」

剣を抜きはなった皇子に、群臣は後ずさった。皇子は、それを鞍作の屍に突き立てた。切っ先は鞍作の軀を貫いて床を鳴らし、血溜まりに波飛沫なみしぶきがたつた。

「天の意！」

古人皇子は蒼さめ、やつと声を振り絞った。

「大臣の逆心を証すものはありや」

葛城皇子は、返り血に染まった貌をあげ、傲然と言い放った。

「蘇我大臣は、板蓋宮を見下ろす甘檜丘に砦のごとき邸を構え、大王を睥睨へいげいし奉った。さらに、かの厨戸皇子と馬子大臣が編んだ国史を、蘇我の邸の奥深くに蔵した。本来、大王の御宮にあるべき国史を私わたくしする蘇我の逆心は明らか」

気圧された古人皇子は、後ずさりし、床に尻を突いた。

中臣鎌子が、静かに姿を現した。

「葛城皇子よ」

鎌子は、膝を突いて拝礼し、告げた。

「巨勢こせのおみ臣、高向たかむけ臣、兵を伴い、法興寺ほうこうじを城として入られたり」

「軍が調うたか」

葛城皇子は大股に、大極殿を出た。

「これより、巨勢臣を大將軍とし、逆臣・蘇我が邸を攻める。吾等に組ぐみする方々は、いざ、法興

寺へ！」

「巫那……何故に」

箸墓の池の畔、巫那は馬を下り、陵戸みさかきの開いた門に入ろうとしていた。大海人皇子が駆け寄ろうとすると、陵戸どもが矛を構えて突きつけた。

「何故に……大臣を」

巫那が振り向いた。白い額に、幾筋か濡れた髪が張り付き、薄い裳は水を含み、肌の色を透かし見せていた。

「汝は……もはや」

大海人は肩で息をしつつ、叫んだ。

「土蜘蛛なるか！」

巫那の眼が大きく見開かれ、瞳が悲しげに揺れた。

「皇子よ！」

叫びとともに、巫那は哄笑した。

「吾を助けることもできなかつたひよわな皇子が、今さら、吾を論さとそうとか？」

巫那は、膝まで水に浸して地に坐し、狂ったように笑い続けた。

大海人皇子は、雨に打たれたまま、立ちつくしていた。

「皇子よ」

振り返れば、鏡郎女であった。その傍らには安見娘。二人の背後に独りずつ、女童が傘を差し掛けている。

「巫那は蘇我鞍作を、この安見娘はその父毛人を、みごとに討った」

「汝等は」

大海人皇子は喘ぐように言った。

「宝大王と蘇我に随うていたはず。汝は、兄なる皇子とまぐわい、故に蘇我に背いたのか！」

「背く？」

鏡郎女は静かに首を振った。

「吾等は誰にも随わぬ。ただ、請われて、より理ある方に力を貸すのみ」

「兄なる皇子に、より理があつたと？」

「然り」

「如何なる理ぞ！」

「言えぬ」

答を振り下ろすように言い切り、鏡郎女は、地に坐した巫那を見下ろした。

「巫那は……ようぞ、し得た。十三の乙女が、みごと蘇我大臣を欺き、討った。称えたまえ、皇子よ」

巫那はゆっくりと貌をあげた。切なげな眼差しが、大海人皇子を追った。皇子は、眼を背けた。

巫那の面差しが歪み、雨の滴に混じって涙が頬を流れ落ちた。

鏡郎女はため息を漏らし、傍らの安見娘に言った。

「巫那を奥へ」

安見娘は頷き、巫那を抱きかかえるようにして立たせた。安見娘に腕をとられ、巫那は返り見もせず、舟橋に足を踏み入れ、池に浮かぶ箸墓の塚へと消えた。女童が、傘を差し伸べて後を追った。

大海人皇子は、しばし、拳を握りしめ俯いていたが、やがて、馬に乗り、駆け去った。

「稚なき皇子よ」

鏡郎女は、遠ざかり行く馬蹄の響きを、寂しげな眼差しで見送った。

甘樫丘の蘇我の邸は、阿鼻叫喚に包まれていた。

蔵より発した火は強風に煽られ、立ち並ぶ家（や）や蔵を焼き尽くし、炎から逃れて丘を降りた人々の多くは、困んだ兵どもの矢や矛に倒れた。

法興寺は、甘樫丘の東の麓にある。かつて、炊屋大王の御代、厨戸皇子と蘇我馬子が、百済の工人を集めて建てた。堂の奥に鎮座する丈六（高さ約5メートル）、金色の大仏の前に、葛城皇子以下、中臣鎌子や高向臣、巨勢臣らが甲冑に身を固め、次々と現れる使者の報せを聞き、矢継ぎ早に命を下していた。

「皇子よ」

入ってきたのは、船恵尺であった。甲冑は火に炙られて黒ずみ、眉や髪も焼け縮れ、頬は赤く腫れている。

「これへ」

皇子は、恵尺を間近に呼び寄せ、声を低めた。

「無事に持ち出せたか？」

恵尺は応えず、懐から半ば焼けこげた一枚の紙片を差し出した。

「これは……」

皇子は呻き、恵尺は俯いた。

「焼け残ったは、これのみにて……」

恵尺は、葛城皇子の命を受け、蘇我の蔵から国史このかみを持ち出す役目だった。あらかじめ、伴部として蘇我の邸に潜入し、国史のありか突き止めた。だが、板蓋宮での変事が伝わる前に、その蔵から火が出た。恵尺が慌てて駆けつけたとき、蔵のなかは火の海であった。炎のなかに、蘇我毛人が、自ら喉を刺し貫いた形で臥せていた。

「おそろく……」

恵尺は言った。

「毛人自ら、国史を焼き、自死したものと……」

葛城皇子は黙した。しばし眼差しを虚空に彷徨さまよわせ、唇を噛かみしめた。怯えたように身を縮ませた恵尺を見、わずかに笑みを作り、致し方ない、よくぞ火をくぐって持ち出してくれた、下がって休め、と言った。

恵尺が退出した後も、葛城皇子は黙したままだった。鏡郎女には、蘇我の邸に、土蜘蛛を一人、女孀として忍び込ませ、あらかじめ「国史」を持ち出しておくようにと頼んであった。だが、皇子は念のため、郎女には報せず、腹心の船恵尺をも潜入させたのだ。

なんとしても己が手にせねばならなかった国史は、すでに灰となった。いぶかしいのは、いまだ板蓋宮での鞍作の死が伝わっていない時に、何故、毛人は、蔵で自害し、自ら国史を焼いたのか……。否、毛人はまことに、自ら死を選んだのか……。

「鎌子！」

皇子は叫んだ。中臣鎌子が、そっと皇子に歩み寄り、膝を突いて拝礼した。皇子はせわしげに耳打ちした。鎌子は再び拝礼し、堂を出た。

「お心安らかに」

箸墓の池の畔の門前に、中臣鎌子と対峙した鏡郎女は、薄い唇に笑みを浮かべて告げた。

「国史はすでに、蘇我の邸に忍ばせてあった者がすべて、書き写した」

「そのような事を訊ねたのではない」

鎌子は、声音は静かに、しかし眼差しは鋭く問うた。

「何故、国史を焼いた」

「国史を焼いたのは蘇我毛人」

「何故、毛人はそのようなことを？」

「死んだ毛人に問え」

「毛人を死なしめ、蔵に火を放ったのは、汝が土蜘蛛ではないのか？」

郎女は応えず、踵を返して背を見せた。

「応えよ！」

鎌子は叫んだ。

「汝も、時には喚わめくか」

郎女は振り向き、微笑んだ。

「応こたえを知りたければ、葛城皇子自ら、ここへ来よ」